

1 文(文章)で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。

b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。

ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されていません。

c ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点(独立採点)すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d **解答通り**という条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

a 答案中に大きな誤読と判定される内容(語句)などがある場合は、その内容(語句)を減点要素として示されている場合もあります。

b 加点要素でも減点要素でもない部分もあります。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、一箇所につき1点の減点要素とします。

a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

*字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「…とはどういうことか?」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

*ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。

また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたもの。

d 答案の文章が最後まで完結していないもの。

4 **古文あるいは漢文の訳を記述する設問**の場合も以上に準じますが、文末の句点や文末の処理あるいは答案の完結にこだわらなくともよい場合はその都度明記されています。

一 (計 50 点)

問一 1 回顧 2 素材 3 営 4 架空 [2点×4]

問二 「オリジナルなき復元」という奇妙な性格 (19 字) [5点]

問三 X—ニ Y—ロ [4点×2]

問四 歴史記述は、記述する側にとっては「オリジナルなき復元」という性格を持つものだが、それを通じてわれわれが知るの、歴史的出来事そのもの、つまり「オリジナル」にはかならないということ。(90 字)
[10点]

A ① 歴史記述は、(1点) ……主語の要素

② 記述する側にとつては (2点) ……人間関係の要素

③ 「オリジナルなき復元」という性格を持つものだが、(2点)

*③がなかった場合、①も②も得点を与えない。

[前半5点]

B ① それを通じて…知るの、(1点) ……主語の要素

② …我々が、…(2点) ……人間関係の要素

③ 歴史的出来事そのもの、つまり「オリジナル」にはかならないということ。(2点)

*「オリジナル」…を欠く場合は1点。さらに「…そのもの」まで欠く場合は、③0点。

*③がなかった場合、①も②も得点を与えない。

[後半5点]

問五 ハ [5点]

問六 歴史的出来事の全体像は、何らかの先行的理解をもっていなければ記述していくことはできないが、逆にそれは、歴史記述を通じてこそ一つ一つ明らかにされるという構造。(78 字) [9点]

A ① 歴史的出来事の全体像は、(2点)

② 何らかの先行的理解をもっていなければ記述していくことはできない (2点)

※①があることによって、②の得点を認める。

B が、逆にそれは、(1点) ……逆接の語句が含まれていること。

C ① 歴史記述を通じてこそ (2点)

② 一つ一つ明らかにされるとい構造。(2点)

※①があることによって、②の得点を認める。

問七 ホ [5点]

□ 現代文 小説 (50点)

問一 8点

【模範解答】

- 常識的で
真面目な世界からの
逸脱を望む大沼にとって、
ふざけている桃男の姿は魅力的だったから。
- (A 2点)
(B 2点)
(C 2点)
(D 2点)

【採点のポイント】

- A 「常識的(な世界)」(2点)
○ 「モラルのある発言をする」「モラリスト」
○ 「インモラルなことを言うと、浮いてしまう」
- B 「真面目(な世界)」(2点)
○ 「内容のある会話ばかり」「実のある話ばかり」
○ 「意味の無い冗談を言うと場が凍りつく」
- C 「逸脱を望む大沼」(2点)
※「逸脱」という語を用いていなくても、「A・Bの世界から逃れたい」という意味が読みとれるものは広く許容する。
○ 「常識的・真面目な世界から」外れない
○ 「常識的・真面目な判断を」止めたい」
- D 「ふざけている桃男の姿」(2点)
○ 「ユーモアセンス抜群」
○ 「冗談ばかり言っている」
○ 「大爆笑をかつさらいながら議論を展開していく」
× 「グループディスカッションで音頭を取る桃男」など、「ふざけている」という意味が含まれないものは、Dポイント0点。

※解答例末の「魅力的だったから」は加点対象としない(傍線部の同語反復に近いため)。

問二 6点 ハ

【模範解答】

在学中はふざけてばかりいた桃男が、
仕事の忙しさを誇示して働くような大人に変わってしまったのを見て、
落胆する気持ち。
(A 3点)
(B 6点)
(C 3点)

【採点のポイント】

A 「在学中はふざけてばかりいた桃男」(3点)

○ 「学生時代は冗談ばかり言っていた桃男」

○ 「以前はユーモアセンス抜群だった桃男」

※「在学中」「学生時代」「以前」などの語は無くても良いが、「ふざけることが好きな桃男が、真面目に仕事をしている様子見て…」のように、「ふざける」性格が現在も続いているように読めるものは、Aポイント0点。

B① 「仕事を片付ける」(3点)

○ 「仕事を真面目にこなす」

○ 「仕事をこなす常識的な大人になる」

△ 「真面目に振舞う」「常識的な大人になる」など、仕事に触れていない場合、Bポイント1点。

B② 「忙しさを誇示して働く」(3点)

※「仕事で忙しい様子を周囲に見せつける」という意味が書けていれば良い。

○ 「得意気に」

○ 「忙しさを見せつける」

○ 「自慢げに」

C 「落胆する気持ち」(3点)

○ 「失望する」

○ 「がっかりする」

○ 「残念に思う」

【模範解答】

- 大沼が、桃男と自分に勝手な期待を押しつけ、
その通りの生き方をしてくれない自分たちに
失望し、
馬鹿にし始めたと感じたから。
(A 4点)
(B 3点)
(C 2点)
(D 3点)

【採点のポイント】

▼ 大沼が期待し、馬鹿にしはじめた対象として、「桃男」と「寅次郎」のどちらかしか記述していない場合、全体から2点減。

(例) 大沼が、自分に勝手な期待を押しつけ、その通りの生き方をしてくれないことに失望し、馬鹿にしはじめたと感じたから。(10点)

- A ① 「大沼が、桃男と自分(寅次郎)に期待」(A ① 2点)
○ 「大沼が、桃男と自分(寅次郎)に理想をあてはめる」
※ 「大沼が」という主語は明示されていなくても良い。

A ② 「勝手な期待をおしつける」(A ② 2点)

※ 期待のあり方が「身勝手」「おしつけ」であることが記述されていれば良い。

- 「一方的に期待する」
○ 「身勝手な期待を抱く」
○ 「期待をおしつける」
△ 「変な期待をする」は、A ②ポイント1点。「おしつけ」のニュアンスが弱いため

- B 「その通りの生き方をしてくれない自分達に」(B 3点)
○ 「期待に沿わない自分達に」
○ 「期待を裏切る自分達に」

- C 「失望し」(2点)
○ 「がっかりする」
○ 「残念に思う」

- D 「馬鹿にしはじめたと感じたから。」(3点)
○ 「見下しはじめたと思ったから」

問五 6点 ホ

問六 完答6点

- X 越境 Y 逸脱 ※「X 逸脱 Y 越境」でも可

三 50点

問一 (1) かんなづき (2) やよい (各③点)

* 「かみなづき・かむなづき」も可。

問二 ① 出家して (③点)

* 「仏門に入って」なども可。

「頭を剃って・髪を切って」など、直接的表現にとどまるものは△①点

② アそろうしているわけにもいかならぬの (⑤点)

* そうしているべきではないので・そのままでいるわけにはいかなないので なども可

ア―③点。そのままの状態ではいられない

イ―②点。 ので・から

③ アみつとまなごころどほアありますが (⑤点)

ア―②点。 見苦しい・苦々しい・気恥ずかしい など可

イ―②点。 丁寧語 あります・おります・ございます・くすくす など

ウ―①点。 逆接「くが・けれど」など

問三 ④ 完了の助動詞「ぬ」の連用形

⑤ 形容動詞「いたづらなり」の連用形活用語尾

⑥ 断定の助動詞「なり」の連用形 (各②点)

* 品詞(助動詞の場合は意味も) + 「終止形」 + 活用形(語尾の場合は語尾も)

完答

問四 ア念珠をしている自分を見て歌を詠んだ人物が、イもうこの世では逢えないと思っていたウ夫の西行であったか

カ。 (⑥点)

ア―②点。 自分に歌を詠んだ人物。

イ―②点。 再会が期待できない * 死んだと思っていた×

ウ―②点。 夫の西行であった

問五 ハ (⑥点)

問六 ア妻が、イ自分の出家を仏道に入る機縁として、ウ一人娘を捨ててまで出家し、エ自分を恨んでいないこと。

(⑦点)

ア―①点。 主語「妻」

イ―②点。 自分(夫・西行)の出家を出家の機縁(きっかけ)としたこと。

ウ―②点。 一人娘を捨てて(預けて)出家したこと。

エ―②点。 自分(夫・西行)を恨んでいないこと。

問七 ニ (⑥点)

四 (漢文) 採点基準 (合計 50 点)

問一 a それがし (2 点)

b やま (2 点)

c まさに (2 点)

d すなわち (2 点)

※カタカナ、歴史的かなづかいは×。

※a「なにかし」は△減点1点。「ほう」は×。

※bを言いきりのかたち「やむ」にしているものは×。

※送り仮名がないもの(c「まさ」p「すなわ」)は×

問二

A 2 点

B 3 点

父を無実の罪に陥れて殺した 郡守に対する仇討ちを

C 2 点

D 3 点

E 不問

何年も果たせなかったが、ようやく果たせた ということ。(10 点)

A 「父を」「無実の罪で」「殺した」それぞれ1点のポイント

例 父を殺した

△減点1点。

父に無実の罪をきせた

△減点1点。

無実の罪で殺した

△減点1点。

B 「郡守」はAの方に入っけていてもよい。

「報」が「仇討ち」「敵討ち」「復讐」などになっていないものは×。

C 「已に数年なれども」と「未だ得ず」それぞれ1点のポイント

「まだつかまえられなかった」「できていなかった」など△減点1点。

D 「(仇討ちを) 果たせた」ことが言えていること。

※「今既に」について「ようやく」「やっつとのこと」「今、ついに」などがなければ△減点1点。

E文末の「〜ということ」の有無は不問とする。

問三

A 4点

人を殺した以上、迷惑がかかるかもしれないから、

B 3点

いつまでも留まっていることはできないので、

C 3点

ここから出て行こうと思います。(8点)

A 傍線部のようにしようとする理由(4点)

※「仇討ちとはいえ、人を殺した」要素3点

※「家の者に迷惑がかかるかもしれない」要素1点

B 「久しく留まるべからざれば」の訳(3点)

※「久しく」は「いつまでも」「長い時間」「長くは」など1点

※「留まる」は「留まっている」「ここにいる」など1点

※「べからず」の不可能の要素が間違っているものは△減点2点

※「已然形+ば」||「ので」の要素が間違っているものは△減点2点

C 「此より辞せんことを請ふ」の訳(3点)

※「ここ(から)」についてはBの方に入ってもよい。

※自己の願望の訳になっていること。

※「ここにいることはやめようと思います」は「辞」のミス△減点2点。

問四

A 2点

子供に乳を飲ませることを口実にして

B 3点

殺し、

C 3点

夫や子供への未練を絶ちきるため。(8点)

A 「(子供を)殺す」ための口実にあたる要素(2点)

※ここを理由にしているものは全体が×

B 子供を「殺し」に来たこと(3点)

※ここが目的であることが曖昧になっていれば全体が×

C 「心情」に相当する部分(3点)

※「夫」はなくても可とする。

※前半(A)に「子供をのこして去るにしのびないので」とあるものは△減点2点とする

問五 (6点)

A 2点

B 1点

C 3点

怪レ 不レ 聞ニ 嬰 児 啼一、 視レ 之、 已 為ニ 其 所レ 殺 矣。

※送り仮名がついているものは×。

※返り点は完答のみ。

問六 ハ (8点)